

【一般演題4】 第22席

「荻野元凱『刺絡編』について」

東京 島田 隆司

『内経』医学の中心的治疗法である刺絡鍼法の歴史を考察するときに、一つの重要な視点は「刺絡」と「瀉血」をどのように考えるかであろう。

中国から日本に輸入された『内経』刺絡療法は腫瘍に対する治療法として以外は長い間顧みられずに放置されていた。江戸中期に至ってオランダ流瀉血療法が紹介されたことによって、あらためて瀉血療法への注目が喚起され、日本独自の刺絡療法の基礎的な観点の構築の必要性が認識されたのである。したがって日本の刺絡療法はこの時期に急速に学と術が深められ、新しい分野を確立したものと考えられる。

この過程の中で荻野元凱の『刺絡編』は理論的な基礎を『内経』に置きながら、西洋流瀉血の正確な技術によってこれを補い、両者を混合することによってあらたな「刺絡療法」を生み出したと言えるのである。その意味で荻野元凱の『刺絡編』は刺絡鍼法を正しく位置づける上で重要な文献といえることができる。